

私は欠けています。

私は人間なのです。

でも、人間ではありません。

私は欠けているからです。

悪魔に奪われてしまいました。

私は欠けてしまった。

だから、お救いください。

神よ、悪魔よ、人間よ。

私を導いてください。

完全なる存在へと。

まだ桜の花が熟したアスファルに、静かに鮮やかさを搾取さくしゆされ萎れている最中の頃だった。

春特有の穏やかな陽射しと静閑とした雰囲気が結晶化され、それでいて妙にそわそわとくすぐつたい気持ちが続わりついて落ち着かない午後。

休日の大学。学業とか全く関係ない用件で図書館へ向かっていた僕は、そのそわそわとした気持ちの原因も他の事象との関連性を考える事を放棄し、習慣と惰性だせいで惚けた思考の足取りで、褐色の煉瓦道れんがを歩いていた。

登山でもしているかと思ってしまう程急勾配の坂道を登る途中、威勢の良い声が聴こえる。近くのグラウンドで野球部かテニス部だか、群れをなしては諾々だくだくとした慣例に縛られながら、そんな事にも気付く事無く時間を消費しているのだろう。

僕はそんな群れを、ただ嘲笑する事も哀れんだりすることなく自分の目的のためだけに足を動かした。

なだらかな右へ曲がり、坂の頂上から公園のような広場に出る。右に四角柱の白い建造物。左に円柱形の銀色の建造物。その間には苔を吹き付けたようなわざと古くしたようなベンチが等間隔で左右に九つづつ置かれている。そしてベンチとベンチの間には、申し訳程度に木が植えられている。

図書館は左側の円柱形の建物。

道の真ん中を堂々と歩いても、人とぶつかる事はない。きつと両手を広げたとしでも問題が無いだろうと思う程、人はいない。

人は、確かにいなかった。

でも、僕はそこで神様に出逢ったんだ。

図書館の入り口からやや離れた場所に、ジュースの自動販売機が置かれている。赤い箱だった。その真つ赤な箱の前には、小さな女の子がいた。

僕は、一瞬、世界を――全てを忘れていた。
足が止まった。

視線が、その赤い箱の前にいる少女へ、それが運命だったかのように向けられていた。

女の子は踵を浮かせ、片手を伸ばして自動販売機のボタンを押そうとしていた。背の小さな、まだ小学校にも上がっていないと思われるぐらい、幼い女の子だった。白いワンピースを着ていた。真っ白で、それでも微かに光沢がある、シルクを纏っているようだった。その純白の衣服とは対照的に、その女の子の髪は黒かった。彼女の身長のおよそ半分に伸びている黒髪は、綺麗に切りそろえられ、反物のようだった。

僕は、彼女の姿を咀嚼するように視認している間に、女の子の背後にまで近づいてしまっていた。

「何が、欲しいのですか……」

僕はそう声をかけた。

女の子は振り返りながら、伸ばした腕を戻し姿勢を正し、上目遣いで僕を見た。

そして僕は何かを失った。

切り揃えられた前髪。静謐とした鏡のような瞳。桜色だが蕾みのような唇。太陽の陽射しを受け入れても尚白磁のような肌をして、性別が認識できない中性的な顔立ち。

僕は直ぐに屈んだ。なぜか、その女の子に見上げられるのが心苦しかったから。

「僕が、君の代わりに……」押し上げますよ、と最後まで言う事が出来なかった。

僕を見つめる女の子の視線が、全てを見透かしているように感じたからだ。僕が口にする言葉は既に意味がないように感じてしまうほど、聡明な視線。

見蕩れていた。

思考は、麻痺していた。

「上から三行目、右から二列目の飲み物が欲しいのです」

女の子は顔だけ振り向き、やや見上げて言った。滑らかな発音。デジタルに変換されたような綺麗な声だった。

僕は立ち上がって、彼女の支持通りに、ボタンを押した。そして再び屈み、排出口から缶を取り出して、女の子に渡した。

「ありがとうございます。とても助かりました」

女の子は深々と頭を下げて、滑らかな動作で顔を上げた。

「お役に立ててよかったです」

女の子は両手で缶を抱える様に持って、射抜く様な……いや、僕という存在を解体して観察するような視線を向けていた。

「どうして、子供の私に、敬語をつかわれるのですか？」

女の子は姿勢を変えず、大人びた口調で訊いた。

僕の思考は痺れたまま。

頭の中が真っ白、という蒙昧な状態。

熱く、神経が焼き切れてしまいうそで、

それが快感だと錯覚して、

純白の虚ろに沈んでしまいうそな気分だった。

「貴女が、僕を見ているからです」

なぜそんな言葉を口にしたのか分からなかった。

でも、女の子の唇は動いた。蕾みが花咲くように口が僅かに開いて、笑みの形になった。そして、口はさらに開かれ、言葉が生まれてくるのではないかと予感した。

だが、女の子から生まれるはずであった声は、別の声で遮られた。

右側の建物の方から、誰かを呼ぶ様な声。白衣を着た初老の男性だった。

女の子はその男性を一瞥して、僕をじつと見つめて「ありがとうございます」。

失礼します」と軽く頭を下げて、白衣の男性の方へ向いて歩き出した。

僕はその女の子の後ろ姿を、まるで蜘蛛の糸に絡まれたように視線で追っていた。縋る様に。未練がましいほど、見ていた。もつと見ていたい。もつと、近くにいた

かった、と。

少女は足を止め、振り向いた。

「また逢えます。あなたは素敵ですから」

まるで僕の未来を読み取って告げるかのように、女の子は魅力的な言葉を残した。

僕は、自分の半分の人生も生きていない幼い女に出逢って、やっと長年の呪縛から解放される天啓を賜ったような気がした。

その純白の女の子は、神様だった。

2

羽井修眞は、灯り方を知らない白熱電球のような人間だった。

悶々と煤のように多くの疑念、妄念、苦悩、正体不明の枷の束に縛られて、健全な成長が遂げられずにただ歳だけを重ねているような、そんな、何かやり残したまま、それを知らないから僕はまだ大人になれずにいるのではないのだろうか、そんな疑問にとり憑かれていた。

僕に取り憑く悪魔の正体に気づいたのは、高校生になってからだだった。

周囲が「恋」や「愛」に盲信している中、僕はただ怯えていた。人は誰しも恋愛をする、というのがまるで常識、いや、正常な人間の条件とでも云われているような、そんな強迫観念に迫られていた。男の子は女の子が、女の子は男の子が、人間は人間に恋をし、そして愛するのが当然であるかのような空気が、僕が知覚する世界では常識であるように見えた。

だから、恋愛が出来ないような人間は異常、社会不適合者、何かしらの人として欠如している。そんな風に云われているような気がした。

「恋愛には興味がないんだ」

そんな一言を口にするだけで、周囲の人間はそいつを軽蔑して見る。虚栄だ、嘘つきだ、見栄っ張り、ナルシスト、変態、性格が悪い、偏屈、などと蔑み言う。

「恋愛」という能動的機能は、人間には基本機能として組み込まれているもので、それが正常に機能しないのなら、それは人間として欠陥があるという事なのだろう。僕は、灯り方を知らない白熱電球のような人間だった。

僕にも有るであろう「恋愛」という能動的機能は、正しく機能しなかった。

僕は、何が原因で故障しているのか、知りたかった。

怖かった。

僕は確かにホモ・サピエンスと分類される生物の身体をしているのに、精神的に……機能的に「人間」ではない、と不安だった。

性解離性障害、という肉体的性別と身体的性別との性認識の齟齬がある場合にその様に呼称されることがあるらしい。だったら僕はどうなのだろうか。性差ではな種が違ふのだから「種解離性障害」と呼ばれてしまうのだろうか。

どうすれば克服できるのか、分からなかった。性転換手術をすれば良いという訳にはいかない。ハード面からではなく、ソフト面からのアプローチが必要だと思っ

た。

呼称の原因の特定が必要なのだろう。

原因……、トラウマがあった。

僕には5つ歳が離れた姉がいた。

過去形。

僕がまだ小学生、高学年である程度の性教育も受け、社会倫理や道徳も学習して、この社会に適應している人格を形成しつつあった頃だった。

僕は、姉に犯された。

優しい姉だった。僕は姉が好きだった。もちろん、家族として、姉弟として。だけど、あの時、アレは狂っていた。いや、狂っていると理解した。

熱い水飴のようなねつとりとした声。暗い部屋。橙色の微かな灯り。夢に半身浸かっている様な両の目。ゆつくりと囲むように伸ばされた両手。暴力的な抱擁。暖かく柔らかい唇と身体が苦しいほど纏わりつく。何か囁いた。アレは何か囁いた。そして末端から蝕まれ、咀嚼され、溶かされ、アレの中で消化されてしまった。まだマスターベーションすら知らない、射精すらまだだった性的に未成熟だった僕を、独りよがりの妄念にとり憑かれたアレは、犯した。

怖かった。

ただ怖かった。

狂っていたんだ。姉は。

狂ってしまったんだ、僕が。

僕の「恋愛」を奪ったのは、実の姉なんだ。

そして、そのまま姉は、死んでしまった。

僕が中学生だった頃。

僕にとって姉は、悪魔だ。

悪魔は、死んでもなお、僕を苦しめる。

だが、悪魔がいるなら、神もいる。

救世主が登場した。

小学生だった頃、リースクールに僕は通っていた。そこには中学生ぐらいの人もいた。そこで、城阪清也という先輩に出逢った。先輩は容姿は細く小柄でか弱く見えるけど、まるで占い師のような、いや、神様のような人だった。僕の舌足らずな言葉だけで、その言葉の意味や深い真意を見抜いてしまう。そして、どんどん深層の気持ち言葉を言葉にして僕から引き出してしまふ。僕にとって城阪先輩は信頼できる人だった。

その先輩と何年振りに再会した時。先輩は中性的な外見ではあったけど、昔より強くなった印象を持った。だからその言葉も、以前より一層強く僕に響いた。

「羽井君は、そのお姉さんにレンプされたから女性恐怖症になって恋愛ができなくなったのではないでしょ。レンプされた時は、怖かったと思うけど、その後は、お姉さんが怖い、のではなくて、卑劣で愚か、だと思っただけじゃないですか。どうかな？」

城阪先輩は、僕の目をじつと見て訊いた。

「話を聞いている限りだけど、お姉さんは「恋愛」の狂信者のような印象を受けた。それが馬鹿馬鹿しく思えたんじゃないのかな。その対象は姉ではなくて、お姉さんが盲信していた「恋愛」なのです。羽井君はもしかしたら、「恋愛」を愚かしいものだと思っているんじゃないの？ 僕もね、姉がいるんです。普段は真面目で教科書通りの優等生なんですけど、彼氏が出来たときのあの情緒不安定さを傍観していると、バカみたいだっと思って思ったな……」

城阪先輩は、ゆつくりと語ってくれた。

「君の言葉で言うなら。羽井君は「恋愛」という機能は、故障している訳でも欠落している訳でもなく、働いていないだけじゃないのかな。封印している、スイッチが押されていない状態だと思う。だからさ……」

城阪先輩は、その時、まぎれもなく

「羽井修真は——人間です」

僕にとって救世主だった。

それは僕が高校生の頃の話。

そして、大学生になった僕は、もう一人の神様に出逢った。

「ああ、それはきつと、瀬在花教授のお嬢さんだよ」

あの女の子と出逢って一週間後、彼女が誰なのかを教えてくれたのは城阪先輩だった。

僕は半ば城阪先輩の後を追うようにして、先輩と同じ大学に入った。でも、先輩は今ではマスターコースを終えて助手をしている。学部が違うから惑星のランデブーのように極たまにしか会って話をする事が出来ない。それでも、僕は先輩と連絡をとって、一週間前の事を聞いてもらった。

大学の近くの喫茶店。窓際の席。焦げ付いたような暗い灯りの中、先輩は静かに僕の話聞いてくれた。

すると、城阪先輩は、その女の子とおぼしき人の事を僕に教えてくれた。

「確か医学部の教授だったと思うよ。でも、学部が違うから詳しくは知らないけど、次期学長になるとかならないとか、どうでもいいか。羽井君がいうその女の子っていうのは、教授のお嬢さんで間違いないと思うよ。だって、図書館の向かいの研究棟から出て来たんでしょ。ちょうどその日、そこで教授と会って挨拶した覚えがあるからさ。え、ああ、私はただちよつと実験のデータ解析で不可解な点があったからボスに質問をしに行った訳だけだね。ま、それもどうでもいいか」

ちなみに僕は先輩がどんな研究をしているか知らない。学部も違えば分野も違うのだから、丁寧に説明をされても、きつと一欠片も理解できないだろう。無機の耐久や弾性がどうか、いつか宇宙で実験が出来るかも、と笑いながら話してくれた。

「天才です」

城阪先輩は、よく通る声で言った。

「大学に居たら天才的な人つてのは会うこともあるでしょ。天才少女・少年や神童だと周囲から呼ばれてたつていう、にわか天才。でも、そんな人は例えば、計算

が速いとか十桁の暗算が一瞬で出来るとか、知識を多く記憶している、後は一芸に、ある分野で秀でた頭脳をもっているとか、そんな人、いない？ そんなのはね、天才なんかじゃないよ。せいぜい、優れた頭脳を持っている程度。でもさ、その瀬在花教授のお嬢さんは、真正銘の天才なのです。羽井君も、一目見て分かったんじゃないかな。そう——まるで神様に出逢った気がしなかった？」

見透かされていた。

先輩が言う天才がどんな物なのか分からないが、でも、確かに僕はあの幼い女の子に、他の人間とは違う、なにか不思議な、得体の知れない感情を抱いていたのは間違いない。

「先輩は……。城阪先輩も、あの子に会ったことがあるんですか？」

先輩の語り口は、まるであの時の僕の感情に類似した、出逢っているような口ぶりのように感じた。城阪先輩は、僕の顔をじつと見ながら頷いて、あの子にまた逢いたい？ と僕に尋ねた。僕は、はい、と答えた。

「二年前に。まだあの子が5歳ぐらいの時に、友人と一緒に会った。そしてまた逢いたいと思った。今の羽井君と同じような気持ちだったんだよ」

先輩はそこで一息ついて、コーヒーを口にした。

「親友として忠告させて欲しい」

カップをコースタに戻して、先輩はそう前置きしてから言った。

「神様は人を救わない」

僕は、再び彼女に出会った。

就職するか院へ進むか、そんな事を頭の片隅で考えながら与えられたテーマの卒論を処理するため、研究室より図書館へ足しげく通っていた。すっかり司書の人に顔と名前を覚えられてしまい、それでも多少融通を効かせてもらっていたから、その日もある論文を閲覧できないか、相談を持ちかけた。普段は閲覧が許可されず鍵が掛かっている場所に、目当ての論文があるらしい。僕はダメもとでお願いをしてみると、あっさりとして許可を得られた。

「ラッキーだったね。今日はなんか、どっかの偉い博士が来てるらしくて、鍵を開けているのよ」

司書の女性は、その博士の邪魔をしないという条件で許可してくれた。

僕は半ば忍び込むように、階段を下りて、ステンレスの柵の行列の中からファイルと一つとって、階段の踊り場に座って論文を読んだ。持ち出し禁止なのだ。

文字。記号の羅列に視界は覆われ、脳内で展開する図形に溺れているうちに、時間を忘れた。そして空間され忘れていた。没頭していた。

だから気づかなかった。

視線が、何か強力な磁力に引っぱられるように、記号の羅列から離れた。

顔を上げると、ステンレス柵の群れ。静閑。

そして振り返ると、女の子がいた。

僕が座っている階段の踊り場より、二段高い位置から世界の全てを俯瞰しているような眼差しで、悠然と佇んでいた。

麻痺していた。時間と空間という概念が麻痺していた。だから、それが一瞬の事だったのか、彼女がどこにいるのか、僕がどこにいるのか、どこから観ているのか分からなかった。

あれから三年経って、女の子の容姿は洗練されていた。服装、彩色は変わらず純白と漆黒だというのに、美に纏わる贅辞が全て卑しく感じてしまうほど美しかった。彼女は、人なのだろうか……。

目が合った。それが一瞬だったのか、それとも悠久のことだったのか分からない。なにもいかも、いや、僕の存在は曖昧だった。曖昧なのに、彼女は神々しく確かに存在していた。

「こんにちは、羽井修眞さん」

女の子は、姿勢を崩す事無く清廉な声で、僕の名前を言った。

「私のこと、覚えていらつしゃいますか」

女の子は、人間らしい質問を僕に向けた。

「はい。忘れることなんて、出来ません」

僕は見上げていた。

女の子が、上品に口元を緩めて微笑んでいた。

直視できなかつた。

人の姿をしているのに、人ではない女の子を。

彼女も、きつと、僕と同じように、種が違う。

僕は人間として有るべき機能が欠如している。

彼女は人間として無いはずの機能が存在する。

種乖離性障害。

僕は誰なのだろうか。

再び襲いかかった疑問。

僕は救いを求めるように言った。

「あなたは――誰ですか」

少女は、微かに吐息を漏らし、悪戯な笑みを浮かべた。

「素晴らしいですわ、羽井さん」

少女のその一言で、たった一言が、僕を救ってくれた。

「貴方でしたら、受け入れましょう」

天啓を受けたように、僕は直感した。

これが恋しい、愛しいという感情なのだ。

これで、僕は灯りだし、人間となったのだ。

悪魔に奪われた「恋愛」を

神様が与えてくれたのです。

僕は、この女の子が愛おしかった。

5

城阪先輩の言葉をやつと理解した。

彼女——瀬在花カナタは、天才だった。

僕と彼女は生物学上同じ「ホモ・サピエンス」なのに、存在している次元が違っている。僕が三次元上に存在するとしたら、彼女は十二次元に七次元の捻りを加えたような所に存在している。つまり、彼女がどこにいるのか理解できない、ということを理解した。

神様のようだった。

生来の無神論者の僕だが、彼女の全てを信じ奉仕しても構わないとさえ思った。

「貴方の在り方は、私と似ているのかもしれない」

「では、僕もあと百年ぐらいたしたら、貴女に追いつけますか？」

僕はそんな愚問を口にした。すると彼女は、

「百年では無理でしょうね」

僕の緊張を消し去る微笑みを浮かべた。

そして、数分の邂逅、彼女は去り際に、

「ですが、待つてさしあげましょう」

そう言い残した。

それが、僕の未来を決めた。

僕は彼女に追いつこうと決めた。

一年後、僕は就職せずに院へ進んだ。

そして、修士課程を修了すると迷う事無く博士課程へ進んだ。ドクタを取るのに四年かかった。マスタからドクタを取る間の記憶は、殆ど研究室で実験しているかデータ解析をしているか、プログラミングをしているかだった。研究に没頭していた。

けどその間にも、瀬在花カナタ博士の噂は耳にした。

彼女は十二歳で、世界最高の頭脳と云われていた。人類でもっとも神に近いときえ謳われるほどで、父である瀬在花教授は今や天才少女の親としてメディアからも注目を浴びているようだった。

彼女の専門は情報工学らしいが、もちろん彼女に専門なんてないのだろう。天才には境界線などないのだから。

僕の専門は、彼女が専門と云われている分野に近いので、しばしば彼女の論文や研究内容などを目にした。その度に、僕は彼女により一層深く惹かれ、あの時の言葉を思い出した。

博士号をとつて、僕はそのまま研究室の助手に就いた。それからもう研究のことしか覚えていない。四季の流れ、朝昼晩、歳月の経過という外界の変化にさえ、その時は思考の片隅にすらなかった。孤独だった。世界できつと僕だけなのだろう、とさえ感じる程研究に溺れていた。だけど、どんなに孤独でも、外界とのネットワークを切断した時でも、僕の頭の中には瀬在花カナタがいた。孤独だけど、一人ではなかった。

そして、三十歳になって僕は助教になった。それから中々研究に没頭する事が出来なくなってしまった。でも、それよりも自分の能力の低下が如実に現れるようになったのが何より、苦しかった。

このまま衰えてしまつては、彼女に会えなくなつてしまう。

そんな焦りが苦悩になって、僕の思考を蝕む。

そんな時、やはり救世主は、僕に力をかしてくれた。

数年ぶりに、城阪先輩と会つた。僕が大学院に入つて以来で、初めて先輩から誘つてきた。場所は大学生の頃によく通つていた、喫茶店だった。

挨拶程度に互いの近況を話をした。先輩は助手から助教になって間もなく、友人の知り合いの会社に引き抜かれ、風変わりな社長の秘書兼パートナに成つて気疲れが堪えないと漏らしていた。

僕の近況を話したが、どうやら先輩はお見通しだったようだ。

「だって、羽井君は瀬在花博士に会つたんだろ、二度も」

城阪先輩は、もう学生ではないのに「君」を付けて僕の名前を言う。僕も、先輩と呼んでいる。

「やっぱり聴いてくれなかつたのですね、忠告したのに……」先輩はなんだか悲しそうなる表情をして、窓の向こうを一瞥した。

真つ暗だった。仄暗い。一瞬、彼女の髪を連想した。

「どうするのこれから？ 噂では瀬在花博士、日本に戻つて研究所を作つて、なんでもバーチャル・リアリティだったかセカンド・リアリティだかの研究しているらしいよ。門外漢の私にはSF小説みたいな話だけど、いつか、電子信号で構築された社会、世界が人間の居場所になるのかな」

「そうでしょうね。今でこそ仮想現実と言われていますが、その仮想と現実の境界はもつと希薄なるでしょう。どちらにしてもその認識は差異は些細なものでしょうが、仮想現実を構築し安定させ安全に運営させるのは、あと一世紀以上かかるでしょうね、瀬在花博士がいなかったら」

彼女がその分野の第一人者、最先端に立っているのは知っていた。僕も、彼女の軌跡を辿り、残した成果を拾いながら、彼女に追いつこうとしているのだから。

「会いたいですか、瀬在花博士に」

「え……」

城阪先輩の突然の質問に、僕は一瞬、暗闇に放り込まれたように思考が停止した。「その瀬在花博士の研究所に、私の所の社長が随分と出資というか進んで開発に参加しててね。ちよつとコネというほどじゃないが、情報がある。近々、その研究室のプログラマが退職するらしい。そこで優秀なプログラマ、特に解析系に秀でた人材が欲しいらしい。確か、羽井君の専門は……有限要素法の解析プログラム設計で、卒論だったか修論でソフトを一つ作っていましたよね」

先輩は、机の上に肘を立て両手を組んで口元を隠しながらよく通る声で言った。

変わっていない。僕の苦悩を解決する手だてを見据えるような視線を向けて、喋る先輩の姿は、昔と同じだった。

「言つておきますが、もちろん必ず採用されるとは限らないし、強制でもない。ただ、こういう機会があることを知つておいて欲しい」

先輩は、考えておいてくれ、と言つた。でも考えるまでもない。答えは決まつている。いや、先輩に導かれているようなものだった。だから先輩の考えておいてくれ、とは準備をしておいてくれと同義だった。

苦悩が落ちた。

「城阪清也は、僕にとって救世主です」

僕は、初めて言つた。

すると、先輩は吐息を漏らすように笑い、

「その役は、私じゃないよ」

言つて、窓の向こうの暗闇を見た。

吟味するほど考える時間なんて必要なかった。答えはあの場ででていたのだから。それはきつと先輩も分かっていると思う。それでも、ゆつくり考えると良い、と言った。きつと先輩の方が色々準備があるのだろう。明日からよろしくお願ひします、なんて簡単に行く様な事ではないのだから。

それならばと、僕の方も色々準備をする事にしようと思ったものの、何も決まってる内から辞表を提出したりするのは、あまりにも軽卒。だから、結局は普段通りに仕事をしていた。でも、以前のような悩みはなかった。

城阪先輩と再会して一ヶ月。先輩から連絡があった。その時、僕は今の職を辞めて行きたいと返答をした。やはり先輩は僕がどう答えるか分かっていた様で、近いうちに試練を受けてもらう、と冗談のような口調で言った。きつと面接のことなのだろう。先輩は最後に、

「まさかと思うけど、瀬在花博士に対して恋愛感情なんて、ないよね」

まるで何時かの忠告のようだった。その問いかけに僕は即答ができなかった。

僕は「恋愛」という機能が故障していた。でも、もしかすると、最後に瀬在花博士に会った時に受けた衝撃、生まれた気持ちというものが「恋愛」という機能が作動した結果ならば、僕は博士に対して「恋愛」感情を持つているのかもいれない。

あれから、僕は灯り続けていたのだから。

二週間後、事務処理と会議の合間に時間を作って、図書館へ向かった。目的は研究に必要な論文の閲覧するため。事前に連絡をしていたから、すんなり閲覧の許可は得られ、何編かファイルを持って、定位置になつている階段の踊り場に座つて論文を斜め読みしていた。

そこに座ると、必ずあの頃の事を思い出す。まだ学生だった頃、ここで論文を読んでいた時、僕は彼女と再会した。

あの頃の集中力はない。こうして論文を読んでも、時間は気になり、誰かが

近づいたら気づいてしまうほど臆病で、凶形や式を思い浮かべても、彼女の顔がフラッシュバックする。

衰えている。

時間と空間に縛られて、思考はどこへ飛べない。

これではとても、百年では、あの時に彼女にも近づけない。

そんな諦めにも似た考えが日に日に肥大している。

だから、城阪先輩の話は好機だった。

彼女の下で研究ができれば、またあの稲妻に打たれたような天啓が、何か救ってくれるような気がした。

なにより、会いたいと望んでいた。

ああ、今になって僕は人間になつたのだろうか。

それは嬉しくも思ったが、

でも、

もしそうなら……。

「羽井先生」

背後から、声が聴こえた。

すぐに気づいた。

幼い声。

顔を上げ、振り返つた。

「あ————」

僕の全ての機能が、一瞬、停止した。

眩しかった。

直視した瞬間、視界は白くなった。

僕の存在が、曖昧になつてしまうほど、眩しかった。

「こんにちは、羽井修真さん。私のこと、覚えていらっしゃいますか」
同じだった。

あの頃と同じ言葉を、彼女は言った。

階段の頂上に、瀬在花カナタが、佇んでいた。

姿形こそ、大人の女性の体つきになっているが、純白のドレスのような服と漆黒の長い髪はあの時のままのよう。そして、あの神々しく感じた存在感は、さらに洗練され、僕の目の前に現れた。

彼女は、もう、人間ではない。

彼女は、もう、神様そのもの。

「なぜ、博士がここに……」

僕はあの頃と違う言葉を使った。

「当たり前なこと仰らないでください」

彼女は微笑んだ。

僕は立ち上がった。

「城阪さんからお話は伺っていますね。だから私がここにいます」

もしかして城阪先輩が言っていた、試練とは、この事だったのか。

「瀬在花博士！ 僕は……ここで貴女と会ってからずっと、博士に追いつこうとがんばりました。ずっと……」

ひと呼吸ついて、彼女を見上げて続けた。

『貴女に会いたかった』

同じ言葉が、異なる二つの声で紡がれた。

僕は驚き、一瞬、呼吸が出来ないほど動揺した。

僕と同じ言葉を、瀬在花博士が言った。

その時、彼女の表情は仮面のように微動だにせず、じつと俯瞰から世界を見ていた。そして、囁くように言った。

「残念です」

僕の存在に対する絶対評価のように、彼女は言った。

「残念って……僕は貴女の下で研究ができないのですか！ 城阪先輩から解析プログラムの専門家が必要だと聞きました。僕の専門は解析プログラム。有限要素法の解析プログラムソフトだって何作か作って、国際的評価も多く貰っています。それでは駄目なのですか。貴女には及ばなくても、少しでも、少しでも貴女の研究に、僕はお役に立てたい。力になりたいんです！」

僕は必死に、ここが図書館だと言う事も憚らず叫んだ。

なのに、瀬在花博士は表情を変える事無く言った。

「それは愛情ですか」

まるで己の罪を問われているような気分がした。

だから力一杯、

「はい。貴女を、とても愛おしく思っています」

僕はそう答えた。

でも博士は、まるで間髪入れず、

「残念です」

同じ言葉を言った。

その顔は、悲しみを表しているようだった。

「以前お会いした時の貴方は、素晴らしかった。共感さえ覚えました。ですが、貴方は人間になられたのね」

「博士、それはどういう……」

「私には、今の貴方は必要ないのです」

囁く様な小さな声で、それでもよく通る音ではっきりと瀬在花博士は宣告した。

『必要ないってなぜですか？』

また二つの声が重なった。

『なぜ僕は駄目なんですか』

また重なった。

『なぜこんな……』

「悪戯をするのですか、かしら」

重なった言葉は、彼女の声だけで最後まで続けた。

「羽井修眞さん。貴方のお気持ちは感謝致します。ですが、貴方はもうすっかり人間として衰えてしまっています。私は、確率は低かったのですが、貴方があの時のまま、身体と精神の種の認識の齟齬を抱えていたのでしたらと期待しておりました。ですが、今の貴方では、私の中の羽井修眞より劣ってしまいます」

「博士の中の羽井修眞……それは一体、どういう意味なので、す、か……」

博士はだまって俯瞰から世界を見ていた。

僕の思考が、灯りが弱くなって行く様に、鈍重なスピードで回転していた。

だから、博士の言葉の意味に気づくのに、時間がかかってしまった。

「多重人格……。貴女は他人の人格を読み込んで……」

天才の頭脳の許容範囲は、彼女一人の人格でもまだ有り余っている。そして他人の人格を読み込み、彼女と同じ時間経過で成長させたとしても、まだ余る。世界が違う。その時間が、その空間が、僕のような凡人とは違う。

あの時から僕が経験した八年余りの時間、でも、それは彼女にとつては、僕が一言喋る時間で経験してしまうほど、時間感覚が、その思考の速さが違いすぎる。もしや、時間という概念さえ、彼女は越えてしまっているのではないだろうか。だとしたら、彼女は本当に……

気づいた瞬間、僕は寒気を感じて、

『貴女は、誰ですか』

あの時の質問を再び口にした。

「私は、私です」

僕はやっぱり、愚かだった。

僕は今になって、姉に感謝した。

あのまま「恋愛」という機能を捨ててしまえば良かった。

『貴女は、どこへ行くのですか』

そうすれば、僕もいつか、彼女に追いつけたのかもしれない。

凡人は、外界の他人を求め、物理的な繋がりがまでしか辿り着けない。

でも、

「どこにもいかず、どこへだっていけます」

天才は、内側に全てがある。

凡人が憧れるような深い繋がりがある。

でも、天才は孤独だ。神様は唯一絶対の存在であり、観測者。だから、観測対象に干渉しない。救わない。

今やつと、城阪先輩の忠告が理解できた。そして先輩はやっぱり僕にとつて、姉

と同じ悪魔だったのだ。神が創造した悪魔は、人間に試練を与える。干渉するのは悪魔だ。人間を救うのは、神様ではなく、悪魔。

僕の目の前に、神様がいる。

僕は、人間です。

人間も彼女の中にいるのだろうか。

彼女の世界は、なにで満ちているのか。

人間を救い、導くのが神ならば……

「瀬在丸カナタ博士……」

僕は呼んだ。

神様の名前。

密かに深呼吸をして、

ゆつくりと、

見様見真似で世界を見据えながら、

僕は、尋ねた。

「人間は、好きですか？」

悪魔の羽音が聴こえてしまいそうなほど、

静かだった。

彼女は、瞬きのように目を瞑ってから、初めて出会った頃の幼さが残る微笑みを浮かべて答えた。

「ええ」

(了)